戦時下の大衆文学者
―村上元三の場合―

丸川　浩

一　はじめに―村上元三を論じる意味―

戦時下の大衆文学者たちの行動や文学活動については、近年の研究の進展によって[1]、徐々に明らかにされつつある。ただし、それは、吉川英治や白井喬二、大仏次郎ら、当時の有力作家についての言及が中心であり、若手作家や中堅作家を含めた大衆文学者全体の動向の解明は、やっとその端緒に就いたばかりという状況である。戦時下の大衆文学者の言動は、年代の差、文学者としての位置の差、ジャンルの差、それまでの経歴の差、人脈の差などによって違いがあるのが当然であり、個々の文学者について言動の解明を積み重ねていくしかない。

本稿で考察の対象とする村上元三の敗戦時に至るまでの経歴を、簡略に述べておく。

一九一〇年に朝鮮の元山に生まれた村上元三は、父親の赴任地の都合で、京城、大阪、仙台、北海道、樺太などを転々とし、中学生になってやっと東京に落ち着き、青山学院中等部を卒業する。卒業後は、父親の事業の関係で、清水市に移るが、ほどなく事業経営は失敗し、母親と妹の三人で東京に戻る。その後、「サンデー毎日」の大衆文芸賞に「利根川の霧」が選外佳作となり、作家への道を歩み始める。一九四一年に第一二回直木賞受賞。同年、長谷川伸、大林清と台湾へ講演旅行に赴く。一九四二年に海軍報道班員として南方に従軍、アンボン島を拠点に、西ニューギニア、東チモール、ジャワ島などを回り、翌年帰国する。帰国後、召集を受けたが、即日帰郷。その後、NHKのラジオ放送劇の台本などを数多く執筆。一九四五年四月の空襲で焼け出され、長谷川伸宅に寄寓、敗戦を迎える。

村上元三が、一般によく知られた作家となるのは、戦後、朝日新聞に連載されて好評を博した『佐々木小次郎』（一九四九年一二月～五〇年一二月）以後であり、戦時下の村上元三は、直木賞を受賞したばかりの、着実に地歩を固めつつある若手作家であったと言えるだろう。ただし、彼は、当時、著名な作家というわけではなかったが、無名作家というわけでもなかった。無名であれば、海軍報道班の徴用作家に選ばれることもなかったろうし、帰還後、内閣情報局の肝入り組織であった南方文化研究会の常任委員や『大東亜文学代表選集―現代日本文学の部』の選定委員になることもなかっただろう[2]。その点で、当時の多くの文学者同様、「戦争協力」の一翼を担った作家であったこと

は間違いない。

では、そのような位置にあった村上元三について、論じるべき特殊性は、どこにあるのだろうか。彼の経歴の中で注目すべきことは、彼が、北海道、樺太という北辺の地で幼少年期を過ごし、作家となってから、台湾に旅行し、南方に従軍することを経験したことである。つまり、彼の移動範囲は、「大日本帝国」の最大版図の北端から南端までが、すっぽり入ることになるわけである。時代小説作家である村上元三は、自分の経験を、そのまま作品化するということはなかった。しかし、南方従軍体験は、現地報告以外に残されていないが[3]、彼の得意とした「北方物」は、北海道、樺太での在住経験がなければ生まれなかっただろうし、台湾を舞台とした作品も、台湾への講演旅行という体験がなければ生まれることはなかったはずなのである。

村上元三は、北海道、樺太、千島を舞台とした「北方物」という一連の作品を書き、当時日本の植民地であった台湾を舞台にした作品(こちらの方は、数は少ない)を書いている。そこでは、先住民族であるアイヌ族、オロッコ(ウイルタ)族、高砂(高山)族らが登場する。彼らに注がれる作者の眼差しは、一見、不当な虐待と蔑視にさらされている先住民族に対するヒューマニスティックな同情と正義感にあふれているが、実際は、作者の意識しない部分で、領土画定のために先住民族を取り込み、「皇民化」政策を推し進めた「大日本帝国」の植民地主義の眼差しと一体化していた。私は、そうした作者が意識していなかった部分に注目したい。そのことによって、一人の時代小説作家によって、「大日本帝国」の植民地主義が、どのように作品化されて行ったかを確認してみたいと考える。

二　北に向けられた眼差し

作家の意識しなかった部分に注目したいと述べたが、北海道・樺太・千島を舞台にした北方物は、村上元三自身が、「僕が一生の念願として書き続ける、自分では『北方物』と呼んでゐる一聯の作品」(『颶風の門』あとがき)と言っているように、意識的に、北方の地に舞台と材料を求めて描いた作品群である。まずは、彼自身が意識していた部分に注目してみよう。

北方物が数多く収録された短編集『先駆者の旗』(一九四〇年九月)には、村上元三の師長谷川伸の序文が付せられていて、村上元三の北方物に込める意識を代弁していると思われるので、引用しておく。長谷川伸は、村上元三が「終始一貫、変わらざる情熱と真実」とで、「日本の北の問題」を作品にしていることを紹介し、次のように書いている。

> 日本の北の問題とは、北海道・千島・樺太のことである。(略)
> 我が国にロシアの触れたるは〝北〟に始まる、ウラジオストックが満州国の失地の一つであるといつただけでも、容易ならざる歴史が、古くから横になり縦になつてゐると思へるだらう、実にその通りだつた。これに関して日本国民よ振返れと呼ぶものが、村上君の一聯の〝北日本小説〟である。彼はそれだから何故に振返らねばならぬかといふそれに応ゆるに作品を以つてしてゐる。

ロシアの南下政策との接点に当たる北方は、歴史的に、ロシアとの緊張関係が高まった時に、幕府や明治政府の関心を招き寄せてきたという経緯がある。一八世紀後半以降のロシアの蝦夷地への接近に促されて、幕府が、それまで領地外と見なしていた蝦夷地を、一時期、松前藩の委任統治から幕領支配へと転換させたことはよく知られている。また、明治に入って、北方の「国境」画定問題が、新政府にとって当面の最大の外交課題の一つであったことは言うまでもない。もっとも、日中戦争が拡大していく昭和十年代に、対ソ関係が最も緊迫していたのは、当時の「満州国」との国境であって、多くの人々の関心は、そちらに注がれていたと言える。だからこそ、「日本国民よ振返れ」ということになるのだが、長谷川伸によるこの紹介は、ほぼ村上元三の北方物にかける問題意識を言い当てていると言っていいだろう。

村上元三の北方物は、おおむね次のような特徴を持っている。まず、北方開拓に情熱を燃やす「日本人」主人公が登場する、そして、その「日本人」は開拓だけでなくロシアの脅威に対する北辺警備の重要性を意識している、さらに、その「日本人」は先住民族に対して友好的同情的態度で接する。長編二編を含む十数編の北方物すべてに、これら三つの要素が必ず表れるわけではないが、北方物に作者が託そうとしたテーマは、これら三つの要素に集約されると言って確かだろう。すなわち、北方開拓、北辺警備、先住民族問題の三つのテーマである。そして、それらのテーマの中心にあるのが、「国境」をめぐる日露間の「容易ならざる歴史」であり、村上元三の北方への関心・意識は、そこから発していると言ってよいと思われる。

これらの三つのテーマがすべて盛り込まれ、時代小説的手法を駆使して北方物を集大成した作品は、村上元三初めての新聞連載小説『颶風の門』（一九四〇年五月～四一年三月）であるが、ここでは、それに先行して書かれた短編「北緯五十度」を取り上げたい。「北緯五十度」を取り上げるのは、題名そのものが「国境」を表しており、北方へ向けられた村上元三の関心をよく示した作品になっているからである。「北緯五十度」は、最初「大衆文芸」（一九三九年一〇月）に掲載され、後に『先駆者の旗』（一九四〇年九月）に収録されたものであるが、現在、手軽に読むことが出来ない小説なので、少し長くなるが、先に、あらすじを上げておこう。

越前の小藩大野藩は、経済的発展の途を北辺に求め、早川寛斎を頭取に、唐太（樺太）鵜城の地に移住士を派遣する。時に、安政六年のことである。江森啓五郎と船島弁之助は、友人同士で、それから四年の間、ともに鵜城の地の開拓に当たっている。漁場をめぐるオロシア人とオロツコ人による攻勢を辛うじてくい止めた時、啓五郎は、オロツコ族の娘シンキンチに出会う。その後、大野に戻っていた寛斎が娘藤乃を伴って帰ってくる。藤乃の獲得をめぐって、啓五郎は、弁之助に敗れたという事情がある。また、啓五郎は、寛斎との間にも、唐太開発と北辺警備に対する考え方の違いを意識する。寛斎と話したその夜、住居に帰った啓五郎は、シンキンチが密かに来訪したことを知る。初雪の降った次の日、寛斎の家で久春内の会所元締畑吟八と運上屋の交易商津軽屋宇兵衛を招いて話し合いが持たれる。オロシア人との紛

争を避け、漁獲と森林伐採に関する協定を結ぼうとする畑の説明に対して、啓五郎は、真っ向から反対をする。席を抜けて外に出た啓五郎を、シンキンチが待ち受けており、二人は結ばれる。翌日、啓五郎は、出立した畑と津軽屋を斬り伏せる。驚く寛斎と弁之助を残して、啓五郎は、シンキンチとともに北の方に去っていく。（明治になって、樺太千島交換条約によって、樺太はロシアの領土となる。この間の説明的な叙述が挿入される）時は経って、明治三十八年日露戦役の時。樺太のメレヤの地に進攻した日本海軍陸戦隊第三小隊長のもとに、オロツコ族の酋長とその息子が面会を求め、道案内を申し出る。このオロツコ族の酋長こそ、七十近い歳に達した啓五郎であり、日本軍の小隊長は、かつての友人弁之助の息子弥一郎であった。

この小説では、越前大野藩の樺太経営への参入、樺太におけるアイヌとオロッコ（＝ウイルタ族）の対立など、基本的には史実を踏まえて書かれている部分が多いが、題名とテーマに関わる、肝心の北緯五十度の「国境」画定に関しては、普通知られている歴史的事実を曲解もしくは改変している。鵜城の大野藩頭取早川寛斎のことばの中に、「外国奉行竹内下野守様の一行は、オロシヤの都ペテルブルクへ赴かれ、唐太の国境を決められた。北緯五十度を境として、北はオロシヤ領、南は日本領と定まつたのぢや」とある。確かに、竹内保徳がペテルブルクに派遣され国境協定を協議したのは一八六二年（文久二年）のことで、小説の時代設定とも合っているのだが、その協議では、北緯五十度線を幕府側が主張しただけでロシアとの合意には達していない。[4] 結局、一八六七年（慶応三年）の「樺太島仮規則」で、日露通好条約（一八五五年）の取り決め通り、樺太は、国際法上ではどこの国にも属さない「無主の地」、日露両国の雑居地とされ、国境画定問題は棚上げされることになるのである。従って、小説「北緯五十度」における北緯五十度の「国境」とは、ありもしない架空の「国境」であると言えるだろう。ちなみに、「樺太千島交換条約」（一八七五年）によってロシア領となった樺太が、日本に割譲され、北緯五十度が「国境」となるのは、日露講和条約（一九〇五年）後のことである。

しかし、それにしてもなぜ、この小説では、この時代にありもしない架空の「国境」を設定しなければならなかったのだろうか。後年の随筆「北方物とわたし」[5]（一九六八年六月）によると、「樺太の北緯五十度から北をロシアに譲り、千島列島を日本領土にするという日本ロシア間の正式な交渉と調印が行なわれている」ことを証明する「古い地図」が村上元三の手許にあるということだから、それを元にしたのには違いない。どんな史料なのか不明なので、何とも言えないが、それはやはり正式なものではなく、日本側の主張が盛り込まれただけの非公式な史料なのではないだろうか。そうでなければ、その後も日露交渉が継続されたという歴史的事実の説明がつかない。一歩譲って、たとえ一八六二年（文久二年）の時点で、樺太の「北緯五十度の国境」が存在したとしても、次の箇所は、明らかに作者の錯誤もしくは歴史的事実の改変を示しているとしか考えられないだろう。

あらすじに記したように、この小説は、日露戦争の場面で終わるが、弁之助の息子弥一郎である日本軍の小隊長は、啓五郎に対して「やります。北緯五十度の国境を撤回して、全樺太を我国の手に取り戻すま

で」と決意を述べる。実際に、日露戦争中に日本軍は樺太全島を一時的に占領するとことにはなる。しかし、「北緯五十度の国境を撤回」しようにも、日露戦争の時点で、「北緯五十度の国境」が存在しなかったことは、その前の説明的な叙述の中で、「樺太千島交換条約」によって樺太がロシア領になった経緯が語られている以上、作者も承知していた事実のはずである。従って、この箇所の「北緯五十度の国境」は、作者の錯誤でなければ、歴史的事実の改変と考えざるを得ない。

いずれにしろ、日露講和条約による割譲後に設置された樺太庁ですら、「樺太古代の事情に就ては、文献の徴すべきものが尠いので、其の統治権が何れの国に帰属してゐたか明瞭でない」[6]ことを認める樺太領有に関して、啓五郎に「唐太全島が我領土であること太古以来明白な日本」と語らせる村上元三には、せめて「北緯五十度」以南を日本古来の領土として認めさせたいという強固な意識があり、その意識が、たまたま存在した史料と結びついて、架空の「国境」を設定させたものと考えられる。「北方物とわたし」の中で、「日本人としての公憤を感じ、わたしはそういう作品（「北方物」＝引用者）を書き続けた」と語る村上元三の意識は、時代を超えて、そのまま啓五郎の意識に乗り移っていると言ってよい。そして、「日本人としての公憤」という言い方が図らずも露呈させているように、啓五郎の意識と行動は、その時代の小藩の藩士としては、突出した「日本人」意識に基づいたものとなっている。啓五郎は、頭取の早川寛斎と次のようなやり取りをする。

「我々が今日までの辛苦、これからも続く困難は、公儀や殿様の御為ばかりなのでせうか」

「異な事を訊くの。それ以外に何がある」

「私は殿様の家来であるよりも、先づ、日本の侍でありたいと思ひます。公儀の為に捨てる生命を、日本の国へ捧げたいのです」

啓五郎は、藩や幕府という枠を越えて、「日本人」という意識を持って行動する人物なのである。このような「日本人」意識の自覚は、村上元三の北方物の主人公に共通して見られる性格である。例えば、長編『颶風の門』の中でも、蝦夷地開拓に情熱を燃やす主人公別所式之助は、次のように語っている。

「おれが働くのは、一南部家の為ではない。また徳川幕府の為でもない。広く日本という国の為なのだ。（略）己の為に己が働くという事は、日本の国民である以上、考えられる筈はないのだ」

啓五郎にしても式之助にしても、彼らの行動の基本には、国家としての「日本」、国民としての「日本人」の意識が強固に存在している。幕末の小藩の武士に、「日本の国民」として、生命を「日本の国に捧げたい」と考えるほどの、「日本」という国家への強固な帰属意識が存在し得たものかどうか。勿論、近世後期にはすでに、国家意識とは言えないまでも、ゆるやかな統合体としての「日本」という意識が広まっていたとも考えられるので、あながち作者の錯誤とばかりは断定できないだろう。しかし、啓五郎にしても式之助にしても、その当時の実態よりも「国民」「国家」の意識が強過ぎることは確かで、村上元三は、国民国家成立後という後の時代の眼で、啓五郎（式之助も）の意識と行動を描いていると考えるべきであろう。

そもそも、「国家」を意識しない限り、「国境」を意識するはずもないのだから、二つのことは一つである。すでに触れたように、村上元三の北方への関心・意識は、「国境」をめぐる日露間の「容易ならざる歴史」から発しているが、その「容易ならざる歴史」を見る村上元三の眼差しは、「日本人としての公憤」ということばが明瞭に示す通り、明治政府によって推進された天皇を中心とする国民国家形成以後の「大日本帝国」の眼差しと一体化している。そして、このことが一層明瞭に表れているのは、先住民族の描かれ方においてである。

幕末・明治初期において、日本が、主権国家として、ヨーロッパ型の「国際法」秩序に組み込まれていく段階で、領土権の主張のために、先住民族の存在を利用したことは、よく知られている。上村英明『先住民族の「近代史」』[7]によると、日本政府（幕府・明治政府）が日露国境交渉で取った論理は、「中国の『朝貢貿易』に類似する日本の異民族貿易制度に参加する周辺諸民族を一方的に『属民』と見なす」ことであり、「その『属民』が居住する範囲には、国家としての固有の『領土権』が主張できる」とするものであったという。そして、「属民」であることを証明するためには、彼らの民族性を抹殺し、日本人に強制的に同化させる必要があったわけである。このように、先住民族の問題は、領土権の主張をめぐって、「国境」画定問題や「日本人」意識の問題とつながっており、村上元三が、北方物に、先住民族のテーマを盛り込んだのは必然的なことだったと言うべきだろう。

「北緯五十度」では、啓五郎は、ロシア人に父親と家族を殺されたオロッコ族の娘シンキンチと結ばれ、二人は北の「国境」へ向かって去る。あらすじに記したように、そこから、話は日露戦争へ時間が飛んで、オロッコ族の「酋長」となった啓五郎は、「樺太のアイヌ、ギリヤーク、オロツコ、併せて四千人の土人は、日本軍の為に喜んで働きます」と日本軍の道案内を申し出る。この小説では、啓五郎がオロッコ族の「酋長」となり、彼らを日本へ帰順させるに至る経緯が一切描かれていない。「酋長」については、シンキンチが酋長の娘であったところから後を継いだと推測されるが、オロッコ族を日本へ帰順させる経緯については、そこでは徹底的な「撫育」が行われたとでも想像するしかない。上村英明の前掲書の中には、一八五六年に、老中阿部正弘によって、サハリン島（＝樺太）東海岸のウイルタ民族（＝オロッコ）への「撫育」が指示された事実が指摘されている。それは、「今後北緯五〇度以南を確固たる日本領と主張するためには、そこに居住する民族が日本に所属することを証明しなければならない」という理由からだったという。村上元三は、特にこうした歴史的事実を踏まえたわけではないだろう。啓五郎の行動は、誰の指示によるものでもなく、全く自発的な意志によるのもである。しかし、オロッコ族の娘と結ばれて、オロッコ族を「撫育」し、日露戦役で日本軍へ帰順せしめた彼の行動は、結果的に、先住民族を利用して、領土画定を目指す「帝国」の意志を実現するものだった。

『颶風の門』の主人公式之助の行動は、一層「帝国」の意志に添うものとなっている。アイヌ族の大酋長サンリに請われて酋長を継いだ式之助（シキサンリ）は、北海道全アイヌを「立派な日本国民」とすることに成功した後、「最後の御奉公」に「樺太のアイヌ土人八百人

に皇恩の有難さを説き、北海道移住をすすめ」て、それに成功する。樺太アイヌたちは、一旦北海道の宗谷へ移され、石狩川沿岸の対雁へ移住させられるために、小樽へ送られる。その時の「アイヌ土人八百数十人の顔は、どれも生きくと輝いていた」と村上元三は書いている。これは、樺太千島交換条約（一八七五年）に伴ってロシア領となった樺太から、アイヌ八四一名が北海道に移住させられたという歴史的事実を一応踏まえてはいる。しかし、それは、日本政府による強制的な移住であって、樺太アイヌが喜んで移住したわけではない。海保洋子「『異域』の内国化と統合―蝦夷地から北海道へ―」によると、樺太が望見できる宗谷に移された樺太アイヌは、彼らの猛反対にもかかわらず、「樺太の海辺部とはまったく環境の異なった石狩平野の対雁」へ移され、「『勧農』と教育をセットにした『帝国臣民』への一気呵成『改造』[8]」を強いられたという。事実は、「生きくと輝いていた」どころではないのである。海保は、樺太アイヌの強制移住（と千島アイヌの色丹島への強制移住）について、次のように結論づけている。「二つの強制移住は、官の『保護』意識で『勧農』と『教育』をもって日本への統合を強制しようとしたものであり、その結果は、衛生状況の低下と人口激減、離散でしかなかった。ともに明治国家の領土画定にともなう、周辺の諸民族への強引な統合の表出である」と。

「北緯五十度」の啓五郎にせよ、『颶風の門』の式之助にせよ、情熱と善意にあふれる生真面目な理想主義者的な人物として造型されている。先住民族に対する「内地人」の蔑視や迫害、「オロシヤ人」の残虐行為に怒りを覚える彼らの行動には、村上元三の「一種のリベラルな考え方」（尾崎秀樹）[9]が示されていると言えなくもないだろう。しかし、これまで見てきたように、彼らの行動は、先住民族の「皇民化」という「帝国」の植民地政策を実現しているに過ぎない。先住民族の側に立てば、ロシアの侵略が悪ならば日本の侵略も悪でなければならないだろうし、強制的に「皇民」に組み入れられることは屈辱でしかないだろう。そして、何よりも、元々「国境」と関わりなしに自由に交易することによって生計を立てていた先住民族たちが、日本とロシアの「国境」をめぐる駆け引きに利用され、その挙げ句に貧困と衰亡の危機に立たされることになったという歴史的事実を忘れることはできない。[10]啓五郎や式之助の行動を、善意の正しい行動として描く村上元三に、そうした視点がが全く欠如していることは言うまでもない。

三　南に向けられた眼差し

村上元三は、台湾を舞台にした作品を多く書いたわけではない。彼の台湾への関心は、一九四一年に講演旅行で台湾へ赴いたことが契機となっている。残された作品も少なく、私が読み得たのも二作品に過ぎない。

まず、「日の出」（一九四二年四月）に掲載され、後に短編集『日月帖』（一九四四年二月　輝文堂書房）に収録された「パイワン族の張将軍」という時代小説から取り上げよう。この小説も、現在、手軽に読むことの出来ない小説なので、[11]あらすじを上げておく。

話は、慶応三年に始まる。舞台は台湾南部（清の統治区域では恒春県）のパイワン族居住地域。クラルツ社の頭目ツジユイに捕えられた張（福州の樟脳商人と語るが、実は日本人）は、首を刎ねられるところを、ロンキヤア十八社の大頭目であるテラソク社のトキトクに救われ、テラソク社に滞在することになる。テラソク社がアミ族の襲撃に遭った時、張はその撃退で勲功を立てる。張の持つ短刀の柄の金紋から日本人だと知るトキトクは、家に伝わる日本の陣太刀を見せて、張が日本人であることを確認しようとするが、張は否定する。そのうち、漂着したアメリカ人が殺されるというロオヴア号事件が起きる。報復のためにアメリカは二隻の軍艦を出動させる。トキトク、ツジユイ、張を中心とするパイワン族の精鋭部隊は、上陸したアメリカ兵を撃退する。事件は、トキトクとアメリカの厦門領事リゼントルの間で和解が成立する。その後、張が台湾を去って、八年が経過する。漂着した琉球藩民五十四人がパイワン族のスクスク社、ボウタヌ社住民に虐殺された事件に端を発し、日本軍の台湾討伐が行われる。日本軍の本営に投誠の意を表しに来たテラソク社の大頭目ヴンキエ（トキトクの後を継いでいる）は、張（今は陸軍中佐仁礼秀松となっている）に再会する。ヴンキエは、張が元島津藩の藩士であり、台湾の事情探索のために来ていたことを聞かされる。他部族鎮撫に功を挙げたヴンキエは、テラソク社に凱旋し、帰国した張（＝仁礼）が置いて行った短刀を受け取る。

あらすじからも容易に導き出されるように、先住民族の中に「日本人」が入り込み、彼らを日本軍に帰順させるというパターンは、「北緯五十度」と同じである。しかし、舞台が樺太から台湾に変わっているために、主人公の意識と行動に大きな違いが認められる。

樺太を舞台とした「北緯五十度」では、ロシアを相手とした、日本の樺太領有をめぐる話となっていたために、啓五郎の行動は、一貫して「日本人」意識に基づいた行動となっていたが、台湾を舞台とした「パイワン族の張将軍」では、清を相手とした、日本の台湾領有をめぐる話となっているわけではないために、張(＝仁礼)の行動は、「日本人」という意識を越えた行動をとらざるを得なくなっている。その結果、同一人物でありながら張と仁礼という二つの名前に分裂しているように、張(＝仁礼)の行動は、張の行動と仁礼の行動の二つに分裂したものになってしまっている。張(＝仁礼)は、トキトクに対して、次のようなことを語る。

外人がさかんに台湾へ兵を上陸させはじめたら、この台湾はどうなります。清国の勢力は追ひ払はれ、台湾は外人の領土になつてしまふ。これではいけない。外人の手から台湾を守るのは、この台湾に大昔から土着してゐた貴方たちの仕事ではないか。

言うまでもなく、「外人」とは西洋人のことであり、アジア人である清国による領有までは否定していない。つまり、張(＝仁礼)の言動は、西洋人に対する「アジア人」という意識に基づいているのである。従って、「この台湾を領有してゐる清国政府には、全く策がない」と見なす張（＝仁礼）が、「外人の手から台湾を守るのは、この台湾に大昔から土着してゐた貴方たちの仕事ではないか」と語り、ローバー号事件後に上陸したアメリカ軍と、先住民族を先導して一緒になって

戦うのは、「アジア人」意識に基づく行動として一応理屈に合っている。では、その八年後に、琉球民遭難事件に端を発し、同じ先住民族で、しかも同じパイワン族である「スクスク、ボウタヌ両社の討伐」を名目に行われた台湾出兵に、日本軍中佐として参加した仁礼（＝張）の行動は、その理屈に合うものと言えるのだろうか。作品内の論理に即して見る限り、日本軍の出兵は、遭難した「琉球藩民」を虐殺した先住民族の「討伐」が目的であり、「外人」の侵略から台湾を守るために先住民族を支援することが目的ではないのだから、日本軍人としての仁礼（＝張）の行動は、八年前までの張（＝仁礼）の言動を裏切る、単なる「日本人」意識に基づく行動であると言うしかないだろう。

作者村上元三は、恐らく、張と仁礼という同一人物のこの「アジア人」意識と「日本人」意識とに分裂した行動を、分裂とは意識していないだろう。張(＝仁礼)の人物像は、北方物の主人公と同じく、情熱あふれる理想主義者タイプである。作者は、張(＝仁礼)の行動を丸ごと肯定的に描いているだけである。そこには、主人公の行動を相対的に捉えるような作者の視点は介在していない（北方物の主人公もこの点同様である）。

先住民族居住区における張(＝仁礼)の行動は、結果的に、諜報活動（島津侯の命による台湾事情の偵察という使命を持っていたとある）というよりも先住民族に対するアジテーション活動となっているが、張(＝仁礼)には、「北緯五十度」の啓五郎のように、土地に止まって指導者となり、先住民族を「撫育」した形跡はない。先住民族が、日本軍の台湾出兵時に、日本軍に「投誠」したのは、あくまでも先住民族たちの自発的な意志によるものという形になっている。恐らく、この先住民族の側からの自発的な日本軍への「投誠」という設定が、張(＝仁礼)の分裂した行動を、唯一救う働きを担っていると言えるだろう。アジアの同胞として先住民族に台湾を守ることを説きながら、日本人として台湾先住民族討伐に参加する張(＝仁礼)は、先住民族にとっては本来的に裏切者であるはずだが、何故か「日本」および「日本人」に対して好意的な一部の先住民族が存在することによって、分裂した行動が正当化されているのである。

しかし、この設定には無理がある。小説では、討伐戦開始直後に、「ヴンキエ」ら「ロンキヤア十八社」の「頭目」が「投誠」の意を表しに訪れるが、実際は、先住民族たちの抵抗は激しく、討伐軍に先住民族が順次投降し始めたのは、「ボウタヌ社」（牡丹社）掃討後のことである。[12] 特に「日本」や「日本人」に好意的な「蕃社」があったわけではない。また、日本が台湾を領有するのは、日清戦争後の一八九五年からであるが、その後、日本の支配に対する先住民族による反抗が各地で起こったことはよく知られている。「理蕃」と呼ばれる支配政策によって、霧社事件（一九三〇年）を最後に、表立った反抗は後を絶つことになる。村上元三が台湾を訪れたのは、一九四一年七月のことで、理蕃政策によって先住民族の「皇民化」が徹底された後のことである。台湾を舞台にした作品は、この時に行った取材や収集した資料をもとに書かれている。従って、日本に対して好意的な先住民族を描く村上元三は、北方物と同じように、後の時代の眼差しで、台湾の先住民族を捉えていることになるだろう。

さらに言えば、張(＝仁礼)の行動に見出される「アジア人」意識と「日本人」意識の分裂には、西洋の支配からのアジアの解放を謳い上げながら、その実日本の植民地支配を正当化したに過ぎなかった「大東亜共栄圏」構想が抱えていた分裂と重なり合う部分があることも指摘し得るだろう。村上元三が台湾を訪れた時期が、豊富な資源を求めて、北進から南進へと「帝国」の方針が決定的に方向転換された後の時期であったことを考えれば、偶然とは思えない。[13] 大雑把な言い方になるが、北方物が「帝国」の北進政策と対応するものとすれば、東南アジア進出のための「南進基地」台湾を舞台とした「パイワン族の張将軍」は、「帝国」の南進政策と対応するものと言えるだろう。その意味で、「パイワン族の張将軍」は、北方物よりも一層、戦時下という時局性の強い作品となっていると言える。

そして、さらに時局性が強い作品が、「台湾総督府情報部推薦」と銘打たれた現代物の戯曲「サヨンの鐘」(「国民演劇」一九四一年一二月)である。ここでも、まず、あらすじを上げておく。

昭和十三年、台湾の「蕃社」である「リヨヘン社」が舞台。「リヨヘン社」の駐在所巡査北田と妻あき子は、「蕃社」の人々に慕われながら、「巡査とお医者と学校の先生」を兼ねるような生活をしている。「蕃社」の娘サヨン・ハヨンは、「勉強はよく出来るし、とても親孝行」で「内地語だつて、ペラペラ」という十七歳の「模範少女」で、バツサイ・ナウイという許婚者がいる。「蕃社」に、台湾総督府嘱託の鉱山技師白瀬と妻宮子がやって来る。白瀬と宮子は不和で離婚寸前の状態にある。宮子はあき子とは旧友同士。宮子は、あき子が、山の中でひどい暮しをしているものと予想して来たが、「立派」な生活をしているのに驚く。北田に召集令が来る。送別会の後、雨と風が強くなる中を、サヨンは北田の荷物を運ぶ途中、崖から落ちてしまう。バツサイに抱かれて北田たちの元に戻ったサヨンは、「日章旗」に自分の名前を寄せ書きして、息絶える。(朗読による後日談。盛大な慰霊祭。その後、台湾総督・海軍大将長谷川清閣下から鐘が贈られ、サヨンの鐘と名づけられたことなどが語られる)台北に移ったあき子を、夫婦仲を取り戻した白瀬夫妻が迎え、サヨンの鐘をあき子が鳴らす場面で、幕となる。

あらすじからも理解できるように、また、「台湾総督府情報部推薦」と銘打たれていることからも容易に予想がつくように、この戯曲は、先住民族の生活の中に溶け込み、彼らの教育(撫育)に熱意と愛情を持って当たる日本人巡査夫婦の姿と、彼らに応えて「立派な帝国臣民」として「皇恩に浴」す先住民族の様子を描くことによって、植民地における「皇民」化政策を丸ごと肯定した国策戯曲である。

この戯曲は、台湾講演旅行中に、当時の台湾総督長谷川清から聞いた実話をもとに、[14] 脚色を加えて書かれたものらしい(「作者附記」にある)が、実話だけではサヨンの死の他にドラマ的な要素がほとんどないので、離婚寸前の白瀬夫婦が、北田巡査夫婦の「立派」な生活に触れることによって再起するというもう一つの物語が挿入されている。勿論、白瀬夫婦の再起の物語は、ドラマ性の付与に止まらず、北田巡査夫婦の献身的な働きとそれに応える先住民族たちとの「純真で清らかな世界」(白瀬宮子の台詞)を強調するためにあるのだが、そ

れ以上に、台湾先住民族に向けられる「内地の人」の眼差しを、特に白瀬宮子の存在によって示そうとしていると言える。

「洋装、都会風」のいでたちで登場する宮子は、当初、先住民族を野蛮人と見なす「内地の人」の眼差しを持って、この地に来ている。この眼差しは、現実の人々の暮しに接することによって、すぐに否定され、北田巡査夫婦の眼差しに同化してしまうので、作品内では、二つの眼差しの対立として展開しない。このことが、ただでさえ平板なこの戯曲を一層平板なものにしているのだが、それはともかく、この「内地の人」の眼差しは、宮子だけでなく、かつて北田あき子にもあったことが、宮子とのやりとりの中で語られる。あき子も宮子も、この地で実際に先住民族たちに接するまでは、「内地の人」と同じ見方だったわけである。「内地の人たちは知つてゐるかしら、この台湾の山の中に内地の人たちに負けない尽忠報国の精神を持った蕃人の青年男女が、こんなに大勢居るといふ事を……、」と語るあき子の夫北田巡査の台詞に注目するならば、この戯曲には、宮子とあき子の眼差しの変化を通して、先住民族を野蛮人と見なす眼差しから、先住民族を「立派な帝国臣民」と見なすもう一つの眼差しへの転換が描かれると同時に、「内地の人」＝「日本人」に向って、眼差しの転換を促そうとする意図が込められていたと言えるだろう。勿論、この二つの眼差しは、ともに「内地の人」＝「日本人」の眼差しの両面の表われであり、一方が、先住民族を「日本人」と異質な存在と見なす眼差しを表し、一方が、先住民族を「日本人」と同質な存在と見なす眼差しを表していることは言うまでもない。そして、さらに言えば、この二つの眼差しは、成田龍一が指摘する「一九三〇年代の植民地政策を象徴する『帝国のまなざし』」の「二つの類型」、一つは、「被侵略者を他者のまま排除・隔離するような視線」、もう一つは、「他者としての被侵略者を自らの内側に包摂するために、彼らのとの境界を一方的に消去するような視線」[16]とも対応していると言えるだろう。

「排除」と「包摂」の二つの眼差しのうち、村上元三の眼差しが後者の側であるのは言うまでもない。それは、すでに北方物でも確認したことでもある。「皇民化」政策そのものの戯曲化とも言える「サヨンの鐘」が、「包摂」の眼差しに貫かれているのは当然だろう。この戯曲には、「日本人」と「高砂族」の顔貌が似ていることに関する登場人物たちのやりとりが、二度も繰り返されている。そこには、村上元三の「彼らのとの境界を一方的に消去するような視線」が如実に表れていると言うべきだろう。

四　おわりに—戦後の帰趨—

「サヨンの鐘」について、村上元三は、戦後五十年近く経って書かれた回想である『思い出の時代作家たち』（一九九五年三月）の中で、執筆の経緯などに触れながら、次のように書いている。

> いわゆる高山族、むかしは生蕃と呼ばれていた人々の集落訪ね、老人や若者などと会っていろんな話をした。向こうも種族別に言葉が違うらしいが、みんなきれいな日本語で統一されていた。

高山族の少女が、日中戦争が始まってから、駐在所の日本人巡査へ軍刀を届けようとし、けわしい山道で重傷をおったが、それでも無事に軍刀を届け、少女は傷がもとで落命した、という実話を知って、わたしは一幕物の芝居を書いた。「サヨンの鐘」という題は、少女の名から取ったのだが、この芝居は情報局からいろんな小さい劇団へ脚本が渡された。わたしの聞いたかぎり、三つの劇団が台湾各地を上演して廻り、台北や台中、高雄などの都会だけではなく、田舎の集落へも行って上演したという。

それも、戦争が終結して、どこでも上演しなくなった。戦意昂揚がテーマでなく、上演をやめる理由はないのだが、軍刀一本が絡んでいるのが目立ったのだろうか。

すでに見たように、「サヨンの鐘」は、露骨な戦意昂揚芝居ではないが、帝国臣民化する台湾先住民族の様子を描き、献身的に彼らを撫育する日本人巡査夫婦の働きを顕彰する芝居になっているのは確かなので、明らかに国策に便乗した芝居である。戦後上演する劇団がないのは当然であろう。しかも、先には触れなかったが、応召する北田に、サヨンの許婚者バッサイが、「私たち、早く兵隊になりたいです。(略)志願兵制度が布かれたら、私たち、きつと立派な兵隊になります」と語る箇所(時代設定は、台湾人の志願兵制度、徴兵制度ができる以前である)もあり、戦意昂揚の要素がなかったとは言えないだろう。

それにしても、村上元三における、戦時中の作品について語る際の、この屈託のなさは何なのだろうか。『思い出の時代作家たち』を読む限り、戦時中の彼が取った行動に関して、戦後の視点からの葛藤の痕跡はほとんど見出せないし、相当の分量を割いて書かれた南方従軍体験も、苦労話の域を出ていない。これでは、戦争中を懐かしんで語る古老と変わるところはないのではないだろうか。それが、「庶民的な作風」(尾崎秀樹)と評される大衆文学者のあり方だとすれば、大衆文学者にとっての戦時体験とは、一体何だったのだろうかという根本的な疑問さえ抱かさせる。

さて、最後に、「帝国」の植民地政策と一体化していた村上元三の眼差しの戦後の帰趨に触れて稿を閉じたい。

戦後の時代小説の本格的復活を世間に印象づけた『佐々木小次郎』(一九四九年一二月〜五〇年一二月)によって、村上元三は、作家的な地位を不動のものとすることになる。それ以後の村上元三は、守備範囲の広い、安定感のある作家として、時代小説界の中堅作家から大家への道を歩む。「一生の念願として書き続ける」と言っていた北方物も、膨大な数の作品群に紛れる形で、目立った作品の中に、戦中の北方物の継承を伺わせる作品は少ない。代表作の中では、『田沼意次』(一九八三年〜八四年)に、『北斗の鐘』(一九四一年四月〜六月)との連続性が一部認められるくらいだろう(両作とも、先住民族の問題は、ほとんど出てこない)。では、村上元三の北に向けられた眼差しは消滅してしまったのだろうか。

一九五四年一月から一二月にかけて「キング」に連載され、『現代国民文学全集』(一九五七年八月　角川書店)に収録された『雪騎士』は、自由民権運動の時代を背景に、北海道官有物払い下げ問題、対雁

土地払い下げ問題と関わっていく元旗本の新聞記者を主人公とした小説である。主人公像が、戦中の北方物の主人公のような生真面目タイプではないという違いはあるが、登場人物の一人に、樺太が、「古から明らかに日本の領土でありながら」と言わせ、黒田清隆に、「あの土人たちは、樺太千島交換のとき、皇恩を慕って北海道へ移住して参ったアイヌであります」と天皇に向って語らせる作者の意識は、戦中と変わっていない。さらに、すでに引用した「北方物とわたし」（一九六八年六月）の中では、「今でも（樺太問題に対する＝引用者）自分の考え方は違っていない。機が来たら、その公憤を打ちまけた作品をまとめてみたい」と書いている。先住民族問題はともかく、ソ連との北方領土問題などによって、戦後、村上元三の北に向けられた眼差しは強化されたという側面もあるだろう。

一方、南に向けられた眼差しはどうか。村上元三は、台湾講演旅行で得た資料やノートを戦災で失ったと書いている。台湾を舞台にした時代小説は書きにくいという事情もあってか、台湾物は書かれていない。勿論、敗戦によって台湾が植民地でなくなったという状況の変化も大きい。その代わりのように、村上元三の南に向けられた眼差しは、琉球・沖縄に向けられる。「沖縄慕情」（一九五〇年八月）の中で、村上元三は、「琉球人はわれわれ内地人と同種族であり、人類学的にみても言語学的にみても、日本の内地人と同じ琉球の人たちが、われわれと一家族としてくらせるようになりたい。それは琉球のすべての人たちが望んでいることだろう（後略）」と書いている。果して、それは「琉球のすべての人たちが望んでいること」だったのか、明治初期の「琉球併合」に至る歴史的経緯を知るわれわれには、そのように単純に思い込むわけにはいかないだろう。そして、何よりも、ここには、戦中と変わらない「彼らとの境界を一方的に消去するような視線」が存在していることを見過ごすことができない。つまり、琉球・沖縄に向けられた村上元三の眼差しは、本質的に、戦時下の台湾に向けられた眼差しと同質なのである。

このように、戦後になっても、敗戦による「帝国」と「植民地」の消滅によって範囲は縮小されたが、「帝国」の植民地政策と一体化していた村上元三の眼差しは、基本的に変更されることはなかった。そして、その眼差しは、北方領土返還をめぐる対ソ関係と沖縄復帰をめぐる対米関係に対する、保守派政治家の戦後日本外交の眼差しとも微妙に交錯しつつ[16]、戦後版保守派ナショナリズムの眼差しへと更新されていくのである。

注（1）池田浩士『〔海外進出文学〕論・序説』（一九九七年三月　インパクト出版会）など。

（2）櫻本富雄『日本文学報国会　大東亜戦争下の文学者たち』（一九九五年六月　青木書店）の調査を参照した。

（3）櫻本富雄『文化人たちの大東亜戦争　ＰＫ部隊が行く』（一九九三七七月　青木書店）には、「アンボン島攻略戦」（『オール讀物』一九四二年六月）以下九編の村上元三の従軍報告が上げられている。

（4）榎本守惠『北海道の歴史』（一九八一年六月　北海道新聞社）などによる。

（5）北海道電力の文化誌「フロンティア」（一九六八年六月）に掲載されたらしいが、現物は未見。木原直彦『樺太文学の旅　上』（一九九四

年一〇月共同文化社）に、引用されている箇所から一部再引用した。

(6) 樺太庁「拓け行く樺太」（「官報附録　週報」一九三七年八月二五日）

(7) 上村英明『先住民族の「近代史」植民地主義を超えるために』（二〇〇一年四月　平凡社選書）

(8) 海保洋子「『異域』の内国化と統合―蝦夷地から北海道へ―」（桑原真人・我部政男編『幕末維新論集9　蝦夷地と琉球』（二〇〇一年六月　吉川弘文館）所収）

(9) 『大衆文学大系28　富田常雄・山岡荘八・村上元三集』（一九七三年八月　講談社）「解説」。

(10) 佐々木史郎『北方から来た交易民　絹と毛皮とサンタン人』（一九九六年六月　NHKブックス）には、アムールや樺太の先住民が、「近代」に巻き込まれて行く悲惨な経緯が書かれている。

(11) 河原功『台湾新文学運動の展開　日本文学との接点』（一九九七年一一月　研文出版）所収の論文「日本文学に現れた霧社事件」に掲げられた「日本文学の上で高山族（いわゆる高砂族）を題材とした作品」のリストにも上がっていない。

(12) 毛利敏彦『台湾出兵　大日本帝国の開幕劇』（一九九六年七月中公新書）、川西政明『昭和文学史　上巻』（二〇〇一年七月　講談社）の「三章　日本とアジア　日本統治下の文学　14　台湾」による。

(13) 日本が決定的に南進政策に踏み切ったのは一九四〇年七月のこと（矢野暢『「南進」の系譜』（一九七五年九月　中公新書））、台湾の「南進基地化」を台湾統治の基本政策としたのは一九三六年九月のこと（伊藤潔『台湾　四百年の歴史と展望』（一九九三年八月　中公新書））である。

(14) 同じ実話をもとに作られ、題名も同じ映画「サヨンの鐘」（一九四三年七月封切　満映・松竹・台湾総督府　監督・清水宏　主演・李香蘭）がある。ただし、村上元三の戯曲とはかなり話が違うし、クレジットにも村上元三の名前は出てこない。また、河原功の前掲論文のリストには、長尾和男『サヨンの鐘』（皇道精神研究普及会一九四三年七月）が上がっており、総督府情報部が意図的に広めたのだろうが、サヨンの話はよく知られていた話だったようである。

(15) 成田龍一『〈歴史〉はいかに語られるか　1930年代「国民の物語」批判』（二〇〇一年四月　NHKブックス）

(16) 六十年安保時に、村上元三は、「安保反対にあらざれば人間にあらざるの記」という文章（題名からだけだと誤解するが、村上元三は安保賛成派である）を発表している。彼が保守政党寄りの立場であることは歴然としている。

『颶風の門』からの引用は、『大衆文学大系28　富田常雄・山岡荘八・村上元三集』（一九七三年八月　講談社）によったが、それ以外の戦時下の作品は、当時発行された雑誌・単行本所収の本文から引用した。

（まるかわ　ひろし、山陽女子短期大学教授）